



平良の歴史

宮古は、古くからミヤークなど称し、外国からは「太平山」typinsanとも称されていました。

14世紀頃までに多くの豪族が出現し、目黒盛豊見親が全島を統一したが、それに敗れた側の与那覇勢頭豊見親が1390年沖繩本島の王権(中山王)に朝貢し、宮古首長へ任命(中山世鑑)されたことにより、琉球王国の統治下へ組み込まれていきます。

1500年、首里王府軍とともに従軍した仲宗根豊見親らによるオヤケ・アカハチの乱平定後、平良に蔵元が置かれ宮古統治が一層強化されました。

近世に入ると王府から在番が派遣され在番仮屋が置かれ、平良、下地、砂川の3頭3間切制度が敷かれます。平良の歴史的な道筋は、王府体制の醸成とともに確立していきます。

1 住屋御嶽(すみやうたき)

神根入りや下りあらうむ真主を祀る。継子いじめの言い伝えがある。根間の里に母に早く逝かれた子供がいたが、継母にいじめられ住屋アブ(穴)に落とされる。根入りやの神は、りっぱなこの子を残念がりあから世(この世)に送り返すという説話である。

1967(昭和42)年与那覇勢頭豊見親の屋敷神を合祀している。根間の里御嶽として、また学問の神様として参拝されている。

2 ドイツ皇帝博愛記念碑

1873(明治6)年7月、上野村国国沖合で座礁難破したドイツ商船口ベルトソン号を救助した宮古の人々の勇気と博愛の精神を称え、3年後の1876年、当時のドイツ皇帝ウイヘルム一世が軍艦を派遣して記念碑を建立した。

3 貢布座跡(こうぶざあと)

近世琉球～近代初期の人頭税制下、貢納布に関する業務のすべてを取り扱った貢布座(こうぶざ)が置かれていた。

1903(明治36)年人頭税廃止後は織物組合事務所を経て、現在は伝統工芸品研究センターとなっている。

4 観音堂経塚(かんおんどうきょうづか)

観音堂は1699(康熙36)年、祥雲寺住職が提唱して創建された。貢租(穀物・織物)を那覇(首里)へ運送する船舶の安全祈願所として、人びとの崇敬を集めていたと伝えられている。

境内に1736(乾隆元)年建立の経塚がある。

5 祥雲寺と石垣

祥雲寺は1611(慶長16)年、薩摩藩検察使の進言で創建された。石垣は18世紀初頭の再建とみなされたが、戦後の1962(昭和37)年、道路拡張のおり、原形を保ち美観をそこねないよう、一部を残して寺域側に移動、復元されている。

6 漲水石畳道

漲水御嶽前から祥雲寺前に伸びる石畳道。旧藩時代は道の北側に政府の蔵元があった。戦火や戦後の道路拡幅工事などで3分の1ほどになっている。

7 蔵元跡(くらもとあと)

仲宗根豊見親は1500(弘治13)年、八重山のオヤケアカハチの乱平定に際して首里王府軍の先導役として宮古勢を率いて参戦、その功績で宮古の支配者としての地位を確立した。諸制度を整備するとともに、漲水港前に政府「蔵元」を設けた。

8 漲水御嶽(はりみずうたき)

宮古島創世神話や人蛇婚説話の伝わる宮古最高の由緒ある御嶽(拝所)。御嶽の石垣は、仲宗根豊見親が八重山のオヤケアカハチの乱平定出陣にさいして戦勝祈願し、凱旋した記念に築いたと伝えられている。

9 仲宗根豊見親(なかそねとうゆみや)の墓

15世紀末から16世紀初頭に掛けて宮古を統治した仲宗根豊見親が父真蒼之子豊見親のために築造したと伝えられる墓。宮古を代表する石造墳墓。墓室は前後二室になっている。

10 アトンマ墓

仲宗根豊見親を元祖とする忠導氏ゆかりの墓で、同氏族の継室(アトンマ)だけを葬ったというので、俗に「アトンマ墓」と称されている。

11 知利真良豊見親(ちりまらとうゆみや)の墓
知利真良豊見親は仲宗根豊見親の三男で、八重山豊見親ともよばれている。墓は1750年頃、その後裔で平良の頭・宮金氏寛富が築造したと伝えられている。1745年～62年まで、平良の頭職を勤め、また、杣山総主取(そまやまそうぬしとり)として大野山林はじめ造林事業に尽力、初めて宮古で瓦を製造したとも伝えられている。

12 恩河里之子親雲上(おんががさとぬしべーちん)の墓碑

恩河里之子親雲上は、旧藩末期首里王府から宮古に派遣された在番役人。現存する墓碑では比較的古いものである。

13 真玉御嶽(まだまうたき)

「御嶽由来記」によれば、男女神かねとのまつ免かを祀り、子孫繁盛の神として崇敬されている。ユークイ願い(豊穰祈願)などが行われる。

14 人頭税石(にんとうぜいせき)

平良市荷川取の臨港道路沿いに立つ高さ143cmの石柱。「ぶばかり石」ともよばれている。王府時代に宮古・八重山地方に人頭税が課せられ、この石の高さになると税を課せられたという伝承があるが、近世琉球では数え15～50歳の男女に賦課されている。

15 湧川マサリヤ御嶽(はくがあまさりやうたき)

荷川取の湧川マサリヤという漁師が、エイという魚を釣りあげたところ、魚はたちまち女性に変身、二人は夫婦となった。のちにマサリヤは金銀楼閣の竜宮に招かれ、土産に瑠璃壺をもらって帰った。以来マサリヤは富裕になった。それを隣人に打明けた途端、壺は白鳥と化し、宮国の「すかぶや」へ飛んでいったとの伝説がある。

16 カー二里御嶽

所在の里の名をカー二里と云い、里の守神を祀ったのが始まりというが、この地に仲宗根豊見親の側室が住んでいたとも

えられている。敵襲に備えて屋敷の門は三方に開かれている。

17 荷川取村番所跡(にかにどりむらばんしょあと)

古琉球から近代初期にかけての荷川取村番所の所在地。番所敷地内には機織場、染め場等も設けられていた。

18 大和井(やまとがあ)

下部に大石をおき上部につれて小さな切石を円形に積み上げている。在番役人・頭など、一部の上層役人だけが使用したとの伝承をもつ宮古唯一の井である。掘年は雍正旧記などから1720年頃と推定される。

19 ンー(芋)又主御嶽

長真氏旨屋は首里王府での公事を終えての帰途、逆風に遭い中国に漂着した。3年後の1597年帰島にさいして芋カズラを持ち帰り、島中に流布した。これによって旨屋は「イモの神さま」としてまつられている。

20 フサティ御嶽

14世紀頃の人で西仲宗根の首長保里天太の居城跡と伝えられている。2基の香炉が置かれたイビの中央に「テダノ主神」左右に「水の神」「トビトリノ主神」とそれぞれ神名が記され、古い長方形の鏡がひとつ安置されている。

21 船立堂(ふなだてどう)

「御嶽由来記」に「船立御嶽男女神かねとの志らこにやすつかさと唱え、船路の願い、諸願

いにつき平良村中崇敬する」とある。農具の神としてもあがめられ、旧11月8日には、フーツキヨーカ(ふいご祭り)が行われる。

22 ユーラジ御嶽

御嶽は小高い所で、25平方メートルの四角の敷地となっている。東側に祠があり、中に香炉が二つ置かれている。又祠の側に石二つが並べられてあり、神が天に上がるところともいわれている。この御嶽一帯はかつての東仲宗根村番所跡である。

23 仲屋金盛ミヤーク(なかやかにもりみやーク)

仲屋金盛豊見親は父仲宗根豊見親のあとを継いで頭職をついだが、首里王府のことがめにより自害したということで、家譜の上では、忠導氏の本宗を継いでいない。西外間小祖(にしづかましようそ)とされている。

24 忠導氏仲宗根家(ちゅうどううじなかそねけ)

忠導氏は古琉球から近代初期まで、白川氏と共に宮古を二分するほどに勢力を誇った旧家である。元祖仲宗根豊見親(童名空広)は目黒盛豊見親の五世孫に当たり、15世紀末から16世紀初めにかけて宮古の主長であった。

25 外間御嶽(ぶかまうたき)

14世紀から15世紀にかけての人物、根間大投司、その子根間の角かわら、目黒盛、その子真角与那盤、その子普佐盛の5人がまつられている。普佐盛の弟、伊かりによって御嶽に仕立てられたと伝えられている。

26 仲屋マブナリ御嶽

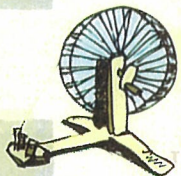
仲屋金盛の娘、父の罪科で「おやけこ」として首里王府に召使われる。やがて、王の目に留まり懐妊するが、宮女たちの嫉妬に耐えかねて帰郷する途中、船頭の卑しい振舞いや暴風で多良間島へ漂着して息絶えた。多良間にはマブナリを葬ったというフタツジ御嶽がある。

27 尻間御嶽(ししまうたき)

尻間山は天神跡を垂れ給う所として御嶽が仕立てられた。仏教とのかかわりも指摘されている。この御嶽は尻間里の里御嶽として、今なお厚く信仰されている。また、受験の時などには各地からの参拝者で賑わっている。

28 住屋遺跡(すみやいせき)

1984(昭和59)年、県文化課によって発掘調査が行われ、14世紀から15世紀前半の竪穴住居址、15世紀後半以降の平地住居址等が検出され、住居形態の変遷を知る手がかりとなった。一帯は17世紀以降首里王府派遣在番仮屋が設けられた所である。近代以降、戦後まで宮古支庁長官舎が設けられていた。



宮古上布の糸を紡ぐヤマ



宮古の伝統舞踊 クイチャー

平良綾道マップ 北コース

旧市街地は平良の歴史の原風景
古えの文化が息づく綾道を歩いてみませんか。



平良五箇(ピサラグカ)は、旧藩時代、西里、下里、荷川取、東仲宗根、西仲宗根の五村のことで市街地を指していました。

平良はピサラと称し、人の住むにふさわしい地
綾道は「美しい道」の意で、それぞれ宮古のことば。